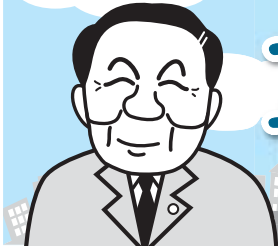


町長の一言

Vol. 6



贈られた本「日本の心」

3月の或る日、50数年前の恩師を囲んだ懇談の席がありました。先生も相当の年配になりましたが、まだまだかくしゃくとされておられ、生徒であつた私共の方が、老化が進んでいるような感じで、「師を越さないように」しなければいけないという冗談も出て楽しいひとときを過ごしました。

帰り際に先生から、自著の「青春に贈る論語」と「心(The soul of Japan)」を頂きました。これは、発行直後にも贈っていたので、おりました。特に「心」は、1898年、新渡戸稲造博士がアメリカで発行した「武士道」を分かり易く書いたものであり、私も丁度、奈良本辰也訳の本を読んでいたところ

でもあつたので、「サムライはなぜ、これほど強い精神力をもてたのか」のサブタイトルにも或る程度理解できました。本の中には、恥を知る・名を惜しむということが出てきます。私は、お天道様が見ているという言葉などとともに、繰り返し心に刻み行動する事により、道徳観や品性が培われていくのではないかと思っております。



この内容は、町ホームページの「町長の部屋」の中でも掲載しています。ぜひご覧ください。

文芸しるさと

俳句

道に出て子猫あそべり春の暮
飯田 勇一
太陽がころもがえする二月かな
一木 雄一郎
白球を打つ音の冴え春兆す
山崎 正行
雨脚の強し茎太水仙花
高橋 芦江
繫がれし小舟にも降り春の雪
和田 範子
春一番エンジン止めし耕耘機
いそべきよ
春の鯛姿正しく売られけり
飯村 愛子
陽の射して蘇枋の蓄ひしめけり
仲田 まちゑ
寶石のやうな一声雉の声
田所 厚子
薪能嫉妬の焔闇に浮く
今瀬 多代美
すれ違ふだけの道幅花菜風
鯉 潤 寿美恵
ふくよかに掌上にある露の茎
飯村 昭子
梅満開雨脚太く音立てて
仲田 こう
下萌ゆる草に声かけ腰おろす
阿久津 あい子
深梅行父の歩幅の狭まれり
竹内 幸子
ふかしたての餃子饅頭雛の町
瀬谷 博子
裏山で戀の季節か山鳩の啼く
岩下 美知野

短歌

八幡宮御守護の羽根をゆらしつ
今年も孫らは破魔矢持ち来る
所 美恵子
大雪に親子ら雪のたるま作り
真赤なバケツの帽子が似合ふ
山形 式 妙
雪のあした隣家の屋根は上部より
少し解けて見ると間に消えぬ
藤原 千代
かて吾子を孫を抱きて今曾孫
も手にせり初春の陽ぬくき庭に
青柳 京子
夜を看とり帰り来し庭に水仙
の緑小さく角ぐみてをり
波辺 千紗子
琴欧州に「亭々と伸びる大杉
のやうに」と言葉を贈る親方
秋山 愛子
水溜り凍夜の朝うすらひて春
陽の中に光放てり
大森 久子
出して見て又片づける不用品
煙となればすつきりすべし
佐川 あや
朝六時家を発つ息子を見送り
ぬ路面凍結に注意をうながし
杉山 みちこ
紅き帽紅き前だれの地蔵尊よ
子らを守らせ給えと祈る
宮本 ふみ江
衣食住足りても足らぬものあり
大事なもの何か欠けていて
山口 栄
観梅の香りゆかしき水戸の梅
千波の沼も晴れて清しき
阿良山 ウメノ

川柳

えんがわにお茶一ぱいと母の
里眺め絶景日本一富士
市川 義子
受話器から大学受験合格と孫
の笑顔が我が目に浮かぶ
岩下 通子
かすかなる左手のしびれ治りおり
「やまゆり荘」にてゆあみの後に
薄井 ひろ
長生きは「ほどほど」がよしと
寂聴尼の講話ききつわれも諾う
枝 不美
労らるる齢になりしかとふと
侘し子に護られて道渡るとき
片見 和枝
身も緊る重き楽の音を聞く
心地朱金色に染む寒の落日
川上 千代子
霏々と降る雪に耐えたいらう
梅の花の灯もいつしか消えぬ
島 愛子
凍つきに耐へ来し川辺の猫柳の
赤芽目に染む待ちに待つ春
多田 志保子
これと言う用はなけれど離れ
住む娘に電話する日曜の午後
坪井 きよ子
隣家より子らの豆撒く声聞こ
ゆ會ての我が家思い起こせり
萩谷 登喜子
西方に月が譲ること薄らげば
東方に日出でて一日始まる
和知 美智子
待ちかねたる荒川静香の金メ
ダル揚がる日の丸が涙にかすむ
富田 佐智子
講演会寝ていた人が拍手する
山本 隆 莊